

新刊

□越前町立福井総合植物園(編):**行幸啓記念福井の植物—福井県樹木誌—**. A4. 316 pp. 2011. 価格表示なし. 越前町. ISBN No number.

2009年6月に天皇皇后両陛下が同植物園を視察されたのを記念する出版. 監修は村田 源, 編集代表は若杉孝生. 県内に産する樹木と比較的よく見られる栽植樹木を網羅し, それぞれ簡単な解説がついている. 全頁カラー写真のたいへん重たい(1.5kg)本である. 先頭に福井県で最近記録されたワカサマンサク, ソメワケキンキマメザクラ, エチゼンインヨウ, シロバナネムノキ, エチゼンスグリ, マルバクサイチゴの解説があり, 最後に学名, 和名の索引がある. 非売品で, 国内の主要な植物園や大学研究室に配布したとのことであるが, 問い合わせは下記へ. 916-0146 越前町朝日, 越前町立福井総合植物園 (Tel/Fax 0778-34-1120) (金井弘夫)

□歌川義男:**続・私の南会津植物誌**. A4. 188 pp. 2011. 価格表示なし. 自費出版. ISBN 978-4-87751-402-0 C0095.

1998年「私の南会津植物誌」を出版した著者(1923年生)が, まだ出し足らなかった仕事やその後の業績をまとめて制作したもの. 四部に分かれている. 第一部(p. 5-87)は牧野標本館に寄贈した標本の中から700余点を選んで, 一頁9点のモノクローム写真が示されている. こういう場合, 「1種につき代表的なもの1点」と, 種類を多くしたがるのが普通だが, 変異の幅の大きい種類では, たとえばヤマモミジとオオモミジは10点もの映像が示され, 移行型の説明図と県内の分布図が加えてあり, 一種の研究発表の場となっている. 第二部(p. 89-124)は植物生態写真で, 標本では示せない色や姿態が示される. 第三部(p. 125-150)は思い出の写真で, 採集途上の点景や人物像が集められており, 今では失われた景観も含んでいる. 第四部は思い出の記で, 永年にわたる教師としての業務の傍ら行われた研究・調査の点描が, 人物評や遭難記や採集旅行記で記述され, いずれも丹念な記録に基づくものである. 表と裏の表紙裏にある南会津郡全図は異なるトピックによるもので, 全域の概観をつかむ参考になる. 本書は私費出版で, 頒布を目的とはしていないように思えるが, 関心ある方は下記に問い合わせられ

たい. 186-0003 国立市富士見台 2-7-5 歌川義男 (Tel 042-575-6648) (金井弘夫)

□館山市植物調査団:**館山市の植物(千葉県植物誌資料 特集6)**. A4. 238 pp. 2011. 価格表示なし. 千葉県植物誌資料編集同人. ISBN No number.

巻末に本書引用のスタイルとして, () の部分を除いた形が指定されている. だがこれでは, この調査団が何者であるかわからない. 79頁にその構成が以下のように示されている. ふるさと房総の植物を記録する会(大場達之), 千葉県立中央博物館(天野 誠, 御巫由紀, 斎木健一), 館山市植物調査ボランティア(秋山由美子, 稲田智紀, 井上健次郎, 亀田栄一, 亀田勢津子, 川崎 一, 小林洋生, 斎藤茂生, 佐藤博秋, 佐藤靖子, 獅子田政代, 須田守儀, 諏訪文二, 高塚圭子, 並木直美, 西木はな子, 西別当嘉男, 平嶋共代, 山中鶴雄, 和田光義, 山井 廣).

調査体制としては, 記録する会と博物館が合同で毎月一回の調査を三年間行い, 大場氏が視認した植物を博物館が記録すると共に必要な標本を採集した. ボランティアは市の協力により募集し, 各自の採集品のデュプリケートを市を通じて博物館に提供, 博物館はこれを同定して採集者に知らせる一方, 他の標本や資料と共に博物館のデータベースに取り込み整理した. これらのデータを大場氏が解析した上, 分布図などにまとめた. 博物館の公衆教育活動という講習会や観察会で, なんとなくレクリエーション的な感じで捉えられていることが多いが, この調査ではアマチュアを含めてしっかりした調査組織が確立されていて, 参加者が調査研究の成果を共有できるように仕組みられており, その成果としての本書は, 従来見られる地域植物誌とは著しく異なっている.

まず最初に, 三次メッシュをかけた市の全域を示す地図に調査ルートを示し, ボランティアによる採集標本数がメッシュごとに表示されている. 次に最近の衛星画像に同じメッシュをかけた写真があり, 前頁の地図と共に地形判読に役立つ. このくらいの縮尺になれば, 家一軒ずつの識別さえできるから, 参加者の関心は高まるだろう. 4-12頁はいくつかの話題性のある植物の写真である. 13-78頁は植物分布図で, 野外調査ばかりでなく文献や既存標本からのデータにより, 1,540種類が一頁24種類ずつ示される. 分布図はすでに千

千葉県植物誌でおなじみの、大場氏の考案による高度別塗り分けのもので、位置の記録や表示は三次メッシュ単位である。最後には県 RD 種の該当種をメッシュごとに選んで保護重要度を加味して積算した値が、メッシュごとに示されており、これによってその地域（メッシュ）の植物的自然の重要度が一覧できるようになっている。ここまでが図版で、81 頁からが本文となる。非常に情報量が多いので、かいつまんで述べる。

89–92 頁、「館山の地名」は、地図上に記されたすべての地名の他に、標本や現地取材による資料を加えて、約 350 件の地名漢字綴りと読みおよび所在メッシュがリストされている。新標本が取り込まれたときに、その位置の検出の便に供することが目的だが、これだけでも人文的研究に使える資料である。かねて水運の守護神にかかわる「住吉」という地名が、三浦半島にはあるが房総半島にはないことが頭に引っかかっていたので、このリストをたどったが、館山市にはやはり無かった。こういう、一見植物と関係ないようなデータでも、他市町村の結果が蓄積されるにつれて、有用性が認識されるだろう。

93–121 頁は標本、文献、野外調査記録に基づく館山市植物目録で、和名、その一連番号（分布図と共通）、保全・管理用記号（5 項目）、学名で、ときにコメントを含む。123–218 頁は館山市植物標本目録で、約 13,000 点が記録されている。219–232 頁は APG III による館山市植物目録で、前出の植物目録や県中央博物館の標本配列が従来のエングラール系に従っているのに対して、近い将来導入されるであろう新システムを紹介するものである。233–238 頁は和名・種番号の索引である。

注意すべきは、位置記録に採用されている三次メッシュのコードが、国が規定する標準地域メッシュコードとは異なることであり、その説明がないことである。引用のスタイルを指定しているのだから、部外者の利用について配慮が必要である。千葉県中央博物館のメッシュコードは、千葉県域を含む 2.5 万図の各葉に北西から順に二桁の一連番号を与え、その中を縦横 10 分割した二桁の番号で位置を規定している。千葉県生物学会では、1950 年代から独自のメッシュシステムによる植物分布調査を行っているのだから、そういう背景もあるのかもしれない。データを相互利用する時代になると、何の気なしに受け取った他機関の作品が、自分のところと同じ方針で作られたと思ってしまう

おそれがあり、用心せねばならないだろう。同時に、資料なり標本なりのオリジナルデータがどこからどこまでなのかということが、後からでも分かるようにしておく必要があるしはないか？よそから提供されたデータを自分のものと混用しようとするとき、どれが原データであるかを知らずに杓子定規に自分のところのスタイルに変換してしまうと、数は多いものの、次第に何やら得体の知れないものに進化して行くおそれがある。

以上でわかるとおり、本書には常識的な「～市植物誌」に期待されるカラー図鑑や種類の解説や検索表は一切なく、言うなればデータ集である。だから、図鑑的な用途を期待して手にした人は、当てがはずれるに違いない。しかし、これらのデータはある程度でも理解できる人には、自然分野ばかりでなく、千葉県ばかりでなく、自分の目的に応じた多様な使い方や研究のヒントがあるだろう。頒価がついていないのは、一般への頒布を目的としていないからだと思うが、末尾に連絡先が次の通り記されている。千葉県植物誌資料編集同人（大場達之）：273-0021 船橋市海神 2-12-3 木村方。（金井弘夫）

□松岡数充：大村湾 新書版。204 pp. 2004. 長崎新聞新書 013. ¥1,143+ 税. ISBN 4-931493-51-3 C0244.

「超閉鎖性海域『琴の海』の自然と環境」の副題がある。著者は渦鞭毛藻類、微生物学、沿岸環境学などが専攻。長崎空港をその中に持つ大村湾は、北西端の針尾瀬戸と早岐瀬戸のごく狭い二つの谷で外海とつながった盆地状の海水湖である。海とつながったのは地史的にはごく最近で、はじめは浅い盆状の淡水湖が堆積物で陸化して盆地となり、後氷期の温暖化による海面上昇の結果、約 9,000 年前から海水の流入が始まり、約 7,000 年前に現在のような「海」となったことが、音波探査やボーリングコアの解析によって明らかにされている。周囲に大きな流入河川がなく、外海の影響を受けることも少ない穏やかな環境の結果、堆積物は極めて微粒で、いわゆる「ヘドロ」となっている。ヘドロというすぐに環境悪化の象徴と目の敵にされるが、大村湾では自然の成り行きとしてそういうものが出来るのであって、これに周辺の人為活動の結果としての「ヘドロ」を上乗せしないような配慮が必要としている。人為が加わる以前の大村湾では、周囲から流入した有機物や

溶存成分が水中の微生物を育み、それが食物連鎖の階梯をへて、大型動物によって、あるいは気体として陸上に送り返され、陸上動植物による利用・分解を経て再び水中へもどるといふ、きわめて長いスパンの物質循環を繰り返してきた。人間の自然環境保全という行為は、こういう長期的循環を妨げるのではないかと、著者は危惧しているように見受けられる。第6章：「時間軸を見つめた自然科学の発想」では、「宇宙カレンダー」（カール・セーガン（木村繁訳）COSMOS(1980)）というものが紹介されている。ビッグバンを1月1日0時0分とし、現在を12月31日24時として表現した暦である。この暦では、地球上の生命の誕生は9月下旬、藻類の発生は10月上旬、陸上植物は12月20日、人類の登場は12月31日22時30分、農業という自然破壊が始まったのは23時59分20秒、産業革命は31日23時59分59秒となる。自然の中での出来事の進み方に対して、人為的な自然破壊が如何に急激なものかを認識すると共に、人間生活を含めた自然に対して良かれと思って行う保護・保全の行為をあらためて見直す材料となるだろう。（金井弘夫）

□池田 博・能城修一（編）：ヒマラヤ・ホットスポット (Ikeda H. and Noshiro S. (ed.) : *Himalaya, Hotspot of Biodiversity*). 東京大学ヒマラヤ植物調査50周年. B5. 2010. ¥3,780.

東京大学総合研究博物館. ISBN No number (Available at Communication Center, University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8654. (Phone +81-3-5841-1039).

1960年に原 寛先生がヒマラヤ植物調査を始められてから50年を記念して、東大総合研究博物館で2010年12月から2011年2月まで特別展示が、1月22日には公開セミナーが行われた。本書はそのまとめと図録である。

K.R. ラジバンダリ・池田 博：東京大学とヒマラヤの植物。調査の歴史的記述（英和对訳）。関係文献表つき。

金井弘夫：初期の東京大学ヒマラヤ植物調査。和文。1960-1972年調査の概要と1963年調査の日記。（日記は文章になっていないなぐり書きだが、リアルタイムの記録だけに、後日の記憶とはずい分印象が違う）。

ワトソン M.F., ペンドリ C.A., 池田 博：ネパール植物誌刊行への道のり（英和对訳）。国際共同

事業の経緯。

以下はそれぞれの研究成果の要約（和文）

高山晴夫：高山植物を誕生させた高山の環境。
若林三千男：ヒマラヤの高山植物の染色体は特異か。能代修一・鈴木三男：なぜ木材構造は標高で異なるのか — ネパール産ツツジ属 *Rhododendron* を対象としてその謎に迫る。大森雄治：温室植物セイタカダイオウ *Rheum nobile* の特異性に挑む — 苞葉の形態と機能。寺島一郎：東ヒマラヤ高山帯におけるセイタカダイオウ *Rheum nobile* の光合成。御影雅幸・垣内信子：学際的研究が解くヒマラヤ植物の多様性 — マオウ属植物を例にして。秋山 忍：ヒマラヤ・中国のツリフネソウ属 — その総合的な分類を目指して。黛新造・大場秀章：ヒマラヤ高山で多様化したベンケイソウ科イワベンケイ属。木場英久：東京大学ヒマラヤ調査隊により収集された植物標本のデータベース。山本伸子・池田 博：ネパール・ヒマラヤ産種子植物の染色体数と倍数性。米倉浩司・秋山 忍・池田 博：東京大学ヒマラヤ調査採集標本に基づく新分類群。

流通市場に乗らないうえ、大学博物館での販売が規則上できないため、次のところで購入できる。送料は800円。東京大学コミュニケーションセンター (Tel 03-5841-1039)。赤門のすぐそばだから、行ってみる方が安上がりかも知れない。

（金井弘夫）